

中・高等学校における  
古典の学習活動に関する実践的研究  
－演劇やライトを通して  
古典に親しむ態度の育成を図る－

教育学研究科 言語文化系教育サブプログラム（国語）

21AF001

山田 真由

【指導教員】 本橋 幸康 薄井 俊二 飯泉 健司  
【キーワード】 授業づくり 古典 和歌 中学校 高等学校

## 1. 問題の所在と研究の目的

高等学校学習指導要領解説国語編（平成30年告示）では、言語文化の性格として、以下のように述べられている。

急速なグローバル化が進展するこれからの社会においては、異なる国や文化に属する人々との関わりが日常的になってくる。このような社会にあつては、国際社会に対する理解を深めるとともに、自らのアイデンティティーを見極め、我が国の一員としての責任と自覚を深めることが重要であり、先人が築き上げてきた伝統と文化を尊重し、豊かな感性や情緒を養い、我が国の言語文化に対する幅広い知識や教養を活用する資質・能力の育成が必要である。（引用：文部科学省（2019））

つまり生徒たちは現在使われている言葉や文化だけではなく、古典として扱う古の言葉や文化も含めて学ぶことが求められている。ところが、直接的に見たり聞いたりする言語ではない古典への興味は薄い傾向にある。国立教育政策研究所（2015）の「高等学校教育課程実施状況調査 生徒質問紙調査（国語総合）」によると、「古文は好きだ」という項目に関して「そう思う」と回答した生徒が11.8%、「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒が18.4%であった。「漢文は好きだ」という項目に関しては「そう思う」と回答した生徒が11.4%、「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒が19.0%であった。この結果から、古典全体を肯定的に感じている生徒が少ないことが分かる。しかし、「古文や漢文の学習は大切だ」という項目に関して「そう思う」と回答した生徒が13.7%、「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒が24.7%であった。「好きだ」という項目よりも割合が高くなっているということは、好きということに対しては否定的だが、古典の意義は分かっている生徒がいることになる。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編には、我が国の言語文化に関する事項が整理されており、以下のような記述がある。

小学校での学習を踏まえ、中学校においても引き続き親し

むことを重視し、その表現を味わったり、自らの表現に生かしたりすることに重点を置いて内容を構成している。

各学年のアは、音読するなどして我が国の伝統的な言語文化の世界に親しむことを系統的に示している。

各学年のイは、第1学年では、古典には様々な種類の作品があることを知ることを、第2学年では、古典に表れたものの見方や考え方を知ることを、第3学年では、長く親しまれている言葉や古典の一節を引用するなどして使うことを示している。（引用：文部科学省（2018））

高等学校学習指導要領解説国語編（平成30年告示）にて、古典の世界に親しむということは以下のように記されている。

古典の世界に対する理解を深めながら、その世界を自らとかけ離れたものと感じることなく、身近で好ましいものと感じて興味・関心を抱くことである。作品や文章に関する歴史的・文化的な情報などを単なる断片的な知識として理解するのではなく、作品や文章に対する影響を与えたものとして理解することを通して、古典の世界のもつ豊穡さや魅力に気付かせることが重要である。（引用：文部科学省（2019））

中学校学習指導要領と高等学校学習指導要領の双方を見ると、小学校から高等学校、更には生涯を通して古典に親しみを持たせることを重視していることが分かる。しかし現実では、古典を好ましく思い学習に取り組んでいる生徒は少ない。古典への親しみを実際に授業で生徒たちに感じさせるべく、中でも身近に感じやすい感情に触れる機会をつくることを考えた。実地研究において、中学校では古典作品の演劇化、高等学校では古典作品のライトを行った。古典授業に関する論文等の中で、そういった活動実践例はあまり見られないため、授業活動の幅を広げる意味でも利点や改善点などを挙げる。また、異なる校種での実習を通して、中学生と高校生それぞれ結びつけながらアプローチを考察していく。

## 2. 1. 授業実践事例 I

実地研究 I では、以下の先行事例を参考に、中学校にて授業を行った。

○ 浜岡・山元の実践 (2015)

「古典を主体的に読むための指導法の研究Ⅳ—「推論する」活動を取り入れた漢文指導の実践—」

教材：『登鶴鶴楼』、『尋胡隠君』、『涼州詞』

<単元計画>(全6時間)

- ・ 漢文、漢詩の基本的な知識を学ぶ (2時間)
- ・ 漢詩三編『登鶴鶴楼』、『尋胡隠君』、『涼州詞』を読む (4時間)

### 1. 指導計画

第3学年2クラス(79名)を対象として、以下に述べるようなA指導とB指導の2種類の指導を試みている。漢文の訓読については、本単元実施の事前(11月初旬)・事後(12月上旬)に、基礎問題(2字・3字の漢語の訓読、意味理解)と応用問題(4字・5字の漢語の訓読、意味理解)を実施した。両クラスの生徒には、漢文訓読のきまり(返り点、置き字、再読文字等)について指導している。

**A指導**→「推論する」活動を学習の中心に据えた指導をしている。具体的には、絶句四句のうちいくつかの句を伏せておき、自分が作者ならば示された漢字をどう組み立てて句を創作するかを推論させる。この学習の中では、読者として「漢詩を読む」とことと、作者として「漢詩を詠む」ことを往還させつつ、作品の情景を読み解いていく過程を楽しませる。生徒は、漢詩に描かれた風景・心情を読み取ったり、自分が作者ならば、次にどんな句を入れるだろうか推論しながら示された漢字を並べ替えたりして詩を完成させる。元の詩を正解として求めるのではなく、どういう意図で漢字(=言葉)を選択し、構成したかを考える学習を通して、漢詩の世界を身近に感じさせることができるように指導をする。

**B指導**→中学校国語教科書の表記に準じた訓読文を示すような指導をしている。書き下し文の書き方を知ることによって、正確に訓読できるようになることを目指した。また、内容の理解については、意味がわからない漢字(=言葉)は辞典を用いるなどして、詩の情景をできるだけ自分の言葉で表現させながら読解を進める。

このような指導方法の違いが、漢文の読解(訓読、意味理解)と漢文学習への関心・意欲の違いに繋がるのか、浜岡・山元はアンケートにて検証を行っている。

## 2. 結果

### ① 漢文の学習は好きだ

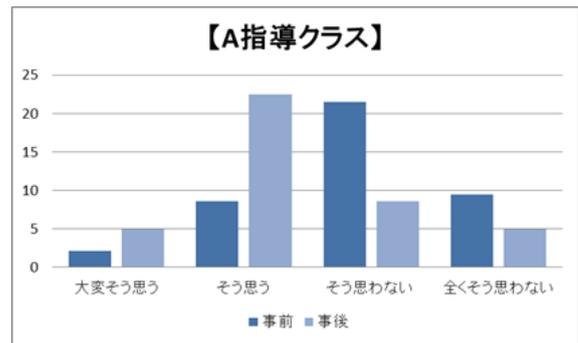


図1：A指導クラス①の回答結果 出典：浜岡・山元(2015)p22

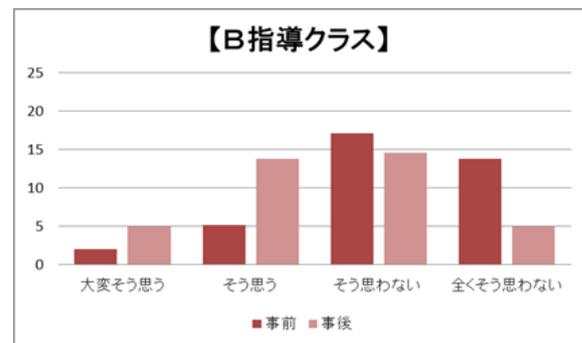


図2：B指導クラス①の回答結果 出典：浜岡・山元(2015)p22

### ② 漢文の学習は得意だ

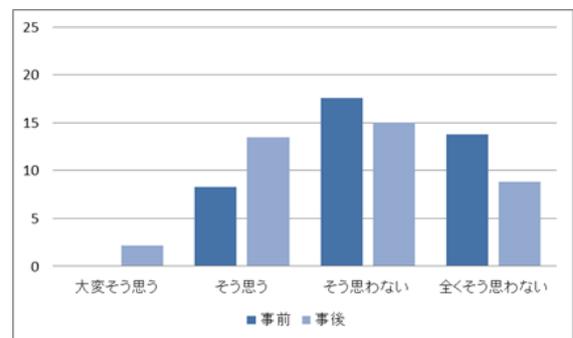


図3：A指導クラス②の回答結果 出典：浜岡・山元(2015)p23

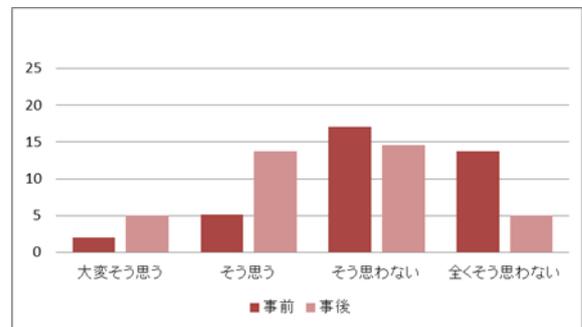


図4：B指導クラス②の回答結果 出典：浜岡・山元(2015)p23

これらの結果のうち、「質問①漢文の学習は好きだ」について、A指導クラスの方が学習後に肯定的な回答（「大変そう思う」と「そう思う」を合わせたもの）に顕著な増加が見られた。アンケートの自由記述を見ると、質問①について肯定的に答えた内容は、次のようになった。

表1：①の理由

A 指導クラス	B 指導クラス
(1) 読解に関すること 16 人	(1) 訓読に関すること 11 人
(2) 訓読に関すること 12 人	(2) 用語や技法の習得に関すること 8 人
(3) 用語や技法の習得に関すること 7 人	(3) 読解に関すること 5 人

出典：浜岡・山元(2015) p23

次に、「質問②漢文の学習は得意である」については、両クラスとも指導によってあまり差が見られなかった。生徒が「得意だ」と感じた内容は次の通りである。

表2：②の得意な内容

A 指導クラス	B 指導クラス
(1) 読解に関すること 12 人	(1) 訓読に関すること 15 人
(2) 訓読に関すること 8 人	(2) 用語や技法の習得に関すること 9 人
(3) 用語や技法の習得に関すること 5 人	(3) 読解に関すること 5 人

出典：浜岡・山元(2015) p24

以下は浜岡・山元が実践後に回収したアンケートの中で、質問①②の結果を踏まえ、学習への意欲が高まったかに対する記述である。

#### 【A 指導クラス】

- ・白文を自分なりに解釈して読むと、いろいろな書き下し文が出てきた。他の人の読み方がわかって面白かった。
- ・作者になったつもりで詩の風景や気持ちを読んでいくと、相手との関係やこの後の行動など、どんどん想像がふくらんでいった。

#### 【B 指導クラス】

- ・今まであやふやなままでやってきたことが、今回の学習ではっきりできて良かった。返り点もルールを覚えれば簡単だった。
- ・漢文は難しいイメージしかなかったが、理解できるようになったので楽しめるようになった。

最後に浜岡・山元は、今回の実践が内容理解を促すことに繋がることを検証するため、漢語の訓読テストを実施している。基礎問題として2字・3字の漢語の訓読と、応用問題と

して4字・5字の漢語の訓読を出題している。テスト結果は次のようになった。

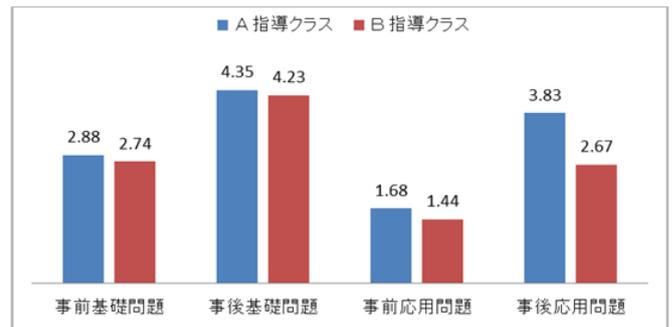


図5：漢語の訓読テストのクラス平均

出典：浜岡・山元(2015) p25

テストの結果では、両クラスとも、基礎、応用問題において事後テストの平均点は高くなっている。A 指導クラスの方がやや伸び幅は大きい。また、無解答率が大幅に下がっている。加えてA 指導クラスでは、不正解であっても助詞や助動詞を入れて語と語を繋げようとした解答が多かったと明記されていた。実践の結果から、漢語の構成を考えるような学習したことは、1語1語の漢字がどのような関係であるかを意識して漢文を訓読することに有効に関わっていると言える。推論をすることで、じっくり漢字と向き合うことにも学習能力の向上にも繋がっている。そして、アンケートの回答にも書かれているように、他人の考えにも触れることで視野を広めることもできる。

浜岡・山元の実践では、生徒自らが「推論する」という活動が入っていた。これを受け、私は実地研究での授業をするにあたり、正解を求めるのではなく生徒自らの思考を大切にしたい。その思考が見えるような授業づくりを意識し、古典を学ぶことへの意欲向上を図ることを目標とした。

#### 実践事例 I

##### i. 概要

実地研究 I では『竹取物語』の教材で授業を行った。『竹取物語』は、日本最古の物語である。幻想的な古典物語を扱うことで、想像を膨らませ、答えのない問いを考え続けるような楽しさを感じることができる。そこで、「古文を読んで本文から読み取ったこと、想像したことを演劇化する」という言語活動を取り入れた。実習校では3年次に演劇コンクールで発表する機会があり、比較的演劇に抵抗がないと考えられることも取り入れた一因である。『竹取物語』の作中で推察できる登場人物の行動や心情を、生徒たちは他の資料と照らし合わせながら想像し、台本をつくり上げ、演じた。演劇化の上では作品を通読し、登場人物の人間性に迫る必要がある。昔話の『かぐや姫』として慣れ親しまれている『竹取物語』は、生徒にとっては受け入れやすい題材である。加えて、昔話の内容と比べて読むと、昔話では様々な描写が省略されていることに気付くと同時に、想像が働くことが考えら

れる。描写一つ取っても非常に多彩で、物語の新たな一面を読み味わうことが可能である。演劇は、グループでの発表としたため、他者との交流も通して古典の世界に浸り、その面白さを実感することを目指した。

### 1. 対象

中学校1年生（1クラス35名）

### 2. 実践内容

#### 2.1. 教材名

「竹取物語」

#### 2.2. 単元名

「物語の世界観を元に考え演じて古典作品の面白さを感じよう」

#### 2.3. 授業の流れ

全4時間で計画を立て、授業を行った。

#### 1 時間目：「竹取物語」の概要を知る。

- ・歴史的仮名遣いを確認した後、教科書を音読する。
- ・『かぐや姫』の場面確認を行い、学習の方向性を捉えさせる。

#### 2 時間目：各々台本の作成や練習

#### 3 時間目：各々台本の作成や練習

- ・リハーサル
- ・演劇発表及び鑑賞

#### 4 時間目：演劇発表及び鑑賞

### 2.4. 手立て

#### (1) 場面設定の工夫

自分とは異なる意見も取り入れやすくするため、4,5人グループで協力して作り上げることを指示した。グループごとにそれぞれ好きな場面を選択し、配役は生徒たちに任せた。

#### (2) 台本の工夫

『竹取物語』の、かぐや姫の誕生から月に帰ってしまつて帝が薬を焼かせるところまでを6つの場面に分け、台本を全て授業者が用意した。しかし、言い回しなどのアレンジは自由とした。台詞も所々穴抜きにして生徒の思考を促すように努めた。教科書本文や、授業者が用意した原文と現代語訳を用いながら、絵本や現代語訳本、ネットワークなど必要に応じて他の資料も使って作品の理解をし、台本に反映させた。台本のメモの欄には、根拠となる部分、演じるうえでのポイントなどを記入するよう指示をした。

#### (3) 振り返り（モニタリングシート）の工夫

授業を重ねるごとに印象や心情が変化していく様子を見たいと思い、1時間ごとに振り返りの時間を設け、項目としては、以下のように設定した。

- ① 単元前の古典作品の印象
- ② 今回の授業で一番心に残ったこと

#### ③ 今回の授業で一番心に残ったこと

#### ④ 単元後の古典作品の印象

単元前後の変容

演劇を通して発見したこと

#### (4) 演劇発表及び鑑賞の際の工夫

発表の際には感想シートを記入させたが、授業者の配慮不足により、工夫した点ではなくただ内容を書く生徒が多くなってしまったため、途中から、自分のグループとの捉え方の違いや工夫した点の発見のための質疑応答の時間を取ることにした。

### ii. 結果

モニタリングシートには、単元前後の古典作品の印象の変化として、程度に差はあっても元より肯定的な回答となっていた。以下はその例である。

- ・古典とは昔と今の共通点も異なる点もあり、時代を越えて親しまれるものだった。
- ・今までは古典の印象は「今とは違う」ようなものだったが、学習の中で、「風習を学べるもの」に変わった。
- ・しっかりと場面を分ければ、今の文と変わらないくらい面白く、理解しやすいという印象に変わった。

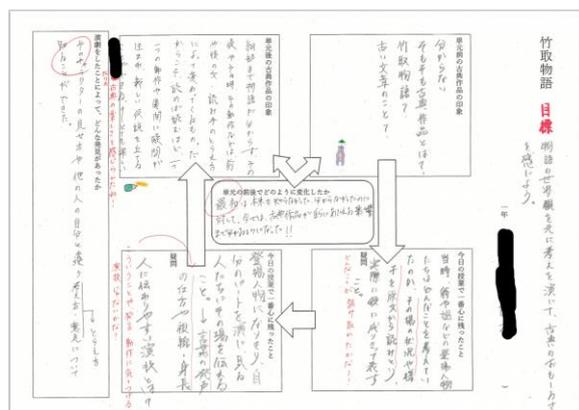


図6：生徒が記入したモニタリングシートの例①

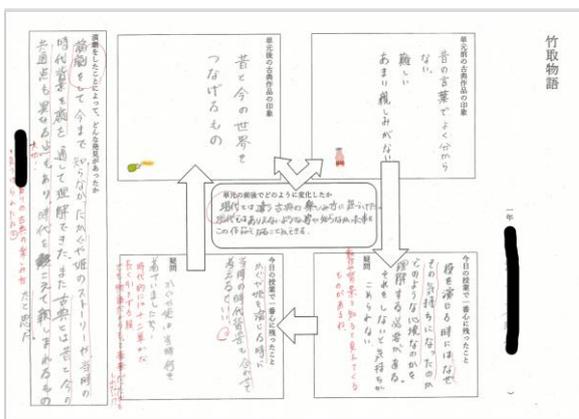


図7：生徒が記入したモニタリングシートの例②

### iii. 考察

演劇の鑑賞をしている生徒たちの様子を見ている中で、古典そのものの楽しさというよりは演劇の楽しさの方が大き

なくなってしまうのではと懸念していた。しかしながらモニタリングシートには「楽しかった」「面白かった」という感想とともに、各々の古典の面白さを見出している記述が見られた。それは、演劇という活動の面白さを感じながらも、演じる上では、作品を通読する必要性や登場人物の人間性に迫る必要性を感じざるを得ない状況にあったことも要因となったと考えられる。中学生で初めて扱う古典作品への親しみを持たせるといふ、入口としては良好な結果だ。また、「ナレーションが聞きやすい」や「演技がうまい」などクラスメイトの新たな一面が見えたり、「自分は意外に演劇が好きだと気づいた」というように自分の新たな一面が見えたり、この授業を通して発見があった生徒も多く見られた。

たい内容を逆算して配列していると考えている。

図 8：評価の観点から逆算した学習過程

内 容	
目標	○文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうことができる。
課題	○男の視点（一人称視点）から物語を書き換える。
(1)	語句の意味や文法事項（呼応の副詞、助動詞、助詞等）を理解して、現代語訳する。
(2)	A 女の問いに答えられなかった場面、B「足ずり」をして泣いた場面、の男の心情を考える。
(3)	男の心情が和歌にどのように読み込まれているかを理解する。
(4)	男の視点（一人称視点）から物語を書き換える。
表現	○男の心情が表現に即して一人称視点で文章化された物語。

出典：吉田(2019)p42

## 2. 2. 授業実践事例Ⅱ

実地研究Ⅱでは、以下の先行事例を参考に高等学校にて授業を行った。実地研究Ⅰを通して、生徒たちが古典を少しでも身近なこととして認識するためには、課題設定の工夫が鍵となることを体感した。

○岩手県立総合教育センター授業づくりガイドブック掲載の実践 (2018)

「人物の心情を理解することで、歌物語の世界観に迫る～物語『伊勢物語』『芥川』の登場人物（男）の視点から物語を書くことを通して～」

教材：『伊勢物語』『芥川』

<単元計画>(全5時間)

- ・『伊勢物語』,「芥川」の内容把握や、基礎的な文法事項の理解 (2時間)
- ・物語中の男の行動の意味や、心情を捉える (1時間)
- ・男の視点 (一人称視点) から物語を書き換える (2時間)

### 1. 指導計画

授業者は、男の心情について語句の意味や文法事項を確かめつつ、本文の構造と内容を的確に把握し、和歌の位置づけを通して一人称視点の物語で表現することの達成を期待している。つまりは文法事項や現代語訳、二つの場面における男の心理などを単元の最後に組み合わせて「男の視点（一人称視点）から物語を書き換える」という総合的な言語活動に取り組む構成となっている。三人称視点で描かれている物語を一人称視点の物語へとリライトを行うことによって、心情を深く理解するために、物語の特徴や内容、構造などを確認すると学習活動の欄に書かれていた。個人で考えたことを更に共有した場によって、表現として、A課題：女の問いに答えなかった理由、B課題：「足ずり」をして泣いたときの心情、それぞれの考えを反映させ書き換えることを条件として提示している。

この指導計画に対し、吉田 (2019) は、何を教えるのかという内容を積み上げていった学習過程ではなく、一人称視点の物語で表現することをゴールとして言語活動に反映させ

実地研究Ⅰにおいて古典への苦手意識の払拭のためにも、学びを表現する場面設定は重要なものであると学んだ。そのため、先に活動内容を設定しそれに向かって必要な手立てを考えることも有効だと考える。生徒はゴールに向かって必要性を感じながら一つ一つの物事に取り組むことが出来る。加えて、教師側としても、生徒が学ぶ事項や方法を示す目処が立ちやすい。しかし、確かに活動を重要視してしまい「どのような力が身に付いたか」といった学びの成果が明確に反映されない可能性があることは否めない。必要な知識事項を身に付けさせつつ、生徒の興味関心を得られるような工夫が必要となる。

## 2. 結果

以下は岩手県立総合教育センター授業づくりガイドブックに掲載されている実際のリライト例とその評価である。

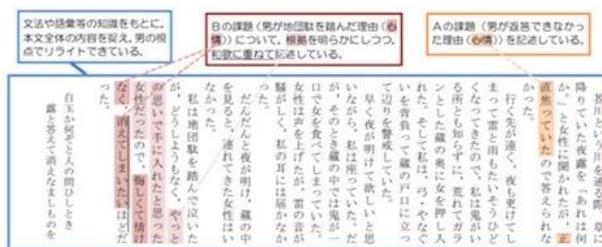


図 9：生徒のリライト例と評価①

出典：授業づくりガイドブック (2018) p68

生徒のリライト例を見てみると、授業者が意図したようにA課題とB課題を踏まえた上で、物語の書き換えが行われている。しかし、原文に「足ずり」「泣けども」など男の感情を表す単語が入っていることもあり、それぞれの生徒の書き換え表現にさほど違いは見られない。心情が把握しにくい女視点の方が多様な書き換えが見られたのではないかと推察する。生徒の個性が出るには、想像の余地を残しておくことも活動内容によって大切である。ただし、物語の現代語訳をするだけの活動になってしまえば物足りない。また、生徒が授業ごとに行っていた振り返りには、物語に登場する和歌は書き換えず原文のままに入れていたせいか「和歌の内容を

学んだもののよく分からなかった。」というコメントが見られた。そこで、書き換えを行うにあたり、実体験や現代の習慣などと繋げることで、より理解がしやすく、古典を身近に感じられると考えた。

### ○教科用図書

東京書籍の『新編言語文化』p176には、言語活動として「和歌を自分の言葉で書き換える」という案が書かれている。和歌は平安時代当時の重要なコミュニケーションツールであったことを述べ、「『古今和歌集』巻十七 雑歌上」から、在原業平と母親が交わした贈答歌を例にして、現代であった場合どのように伝え合うだろうかと問い、次のように課題設定がされている。

課題：「筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに」と「くらべこし振り分け髪も肩過ぎぬ君ならずして誰か上ぐべき」の歌を、現代のコミュニケーションツールで伝え合うことを想定して、自分の言葉で書き換えよう。

1. それぞれの歌のメッセージの核心を10字以内でまとめよう。
2. 1を踏まえて、それぞれの歌を書き換えよう。
3. 書き換えた作品を互いに読み合い、元の和歌と比較しながら、表現の工夫について批評し合おう。

(引用：東京書籍株式会社(2021))

この例では、返歌の存在によって、言葉を互いに送ることのできるLINEのようなコミュニケーションツールが想定されている。スマートフォンが広く普及している中、SNSは高校生たちにとって身近なものだと言える。しかし実地研究Ⅱの中で行った授業では、返歌は扱わなかった。よって、和歌を中古の人々が誰に対してというわけでもなく景色や心情について吐露した「先人のつづやき」だと捉え、現代において同様の要素を持つTwitterの「つづやき」の形式を用いた。

### 実践事例Ⅱ

#### i. 概要

今回の授業は『伊勢物語』の「芥川」を中心に和歌を扱った。『伊勢物語』は、恋愛譚が中心のため高校生の興味関心を引きつけやすい。また、歌物語であり、詩歌が入っていることによって他の教材とも結び付けやすい。ただし、古文に対して、内容理解に苦手意識を持っている生徒も少なくないため、少しでも身近に感じながら古典の世界に浸ることのできる機会を設けたい。本単元では、「古文を読み、自分の言葉に直す」という言語活動を設定した。『伊勢物語』の学習を踏まえ、詩歌の作品によって推察できる登場人物の行動や心情を、想像し、自分の言葉に直す。自分の言葉に直すためには作品をよく読んで、作者の意図に迫る必要がある。140字以内という制限もある中でどう他者に自分の解釈を伝えるか、生徒それぞれの思考を促していく。昔と今に通じる想いや背景などにも注目する。歌に込められた感情によって今

に通じるものを感じ取り、苦手意識の改善に繋がるよう努める。実地研究Ⅱの学校の生徒たちは話し合いなどの活動に慣れており、一人でも複数人でも自分の考えを持つことが出来るため、双方で学びを深められる授業設定を意識した。

#### 1. 対象

高等学校1年生(1クラス40名)

#### 2. 実践内容

##### 2.1. 教材名

『伊勢物語』 「芥川」 「折々のうた」 (『新編言語文化』東京書籍)

##### 2.2. 単元名

「昔のつづやきを今のつづやきに変えよう」

##### 2.3. 授業の流れ

全3時間で計画を立て、授業を行った。

##### 1 時間目：・「伊勢物語」の概要を知る。

- ・教科書を音読する。
- ・助動詞やキーワードを中心に確認しながら、内容把握させる。

##### 2 時間目：・修辞法などの基礎事項の説明

- ・各自選択した詩歌を自分の言葉で書き直す。

##### 3 時間目：・各自選択した詩歌を自分の言葉で書き直す。

- ・プリントの鑑賞

#### 2.4. 手立て

##### (1)活動内容

「芥川」に登場する和歌に加え、「折々のうた」に掲載されている4首の和歌の中から1首選ばせる。メモ用プリントを元にしてTwitterをモチーフにした本番用プリントに、自分の言葉で書き直す。メモ用プリントには、選んだ和歌に関する背景や関連する自身の体験などを書き込む。これを一番重要視し、生徒の思考の過程を見るために、細かく書けるよう時間をとった。Twitterは140字以内と制限があるため、本番用プリントも同様とした。

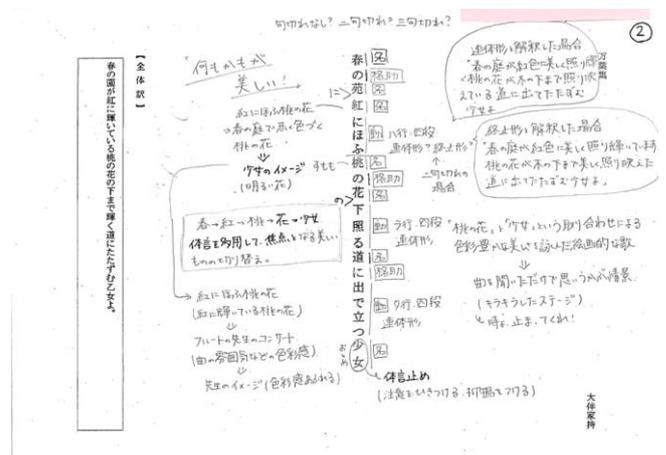


図10：生徒が記入したメモ用プリントの例①

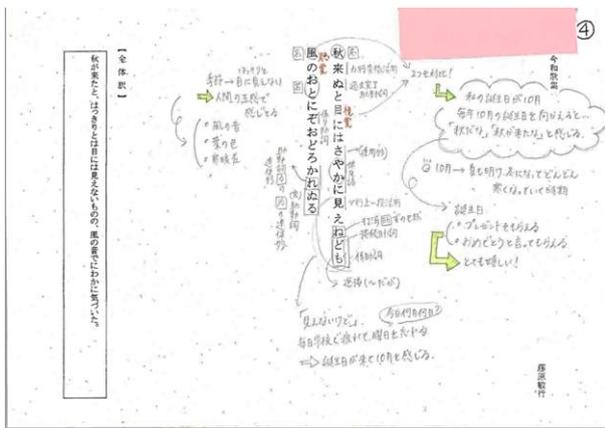


図 11：生徒が記入したメモ用プリントの例②

和歌の背景や作者の心情などを調べた上で、自分のエピソードにどう繋がるかの流れが細かく書かれている。登場する花や気象に、今回特に指示を出していなかったが、五感にどう訴えられているかについて書く生徒が何人も見られた。

## (2) 活動のポイント

活動を行う際、以下の2点を意識することを指示した。

- ① 実際の自分の体験を取り入れて書き直しを行う。
- ② 和歌の修辞法などを含め、作者が工夫した点や感情は汲み取って表現する。(悲しい感情は悲しいままに、嬉しい感情は嬉しいままに)

## (3) 鑑賞の際の工夫

班の中で代表を二枚選出し、その作品を机の上に置いて、時間ごとに隣の班に移動していくという鑑賞の方法で行った。元の班に戻ってきた時点で作品をいくつか紹介し、テキストに戻ってオリジナリティが出ているところや、作者の感情などを生徒に聞きながら全体で共有する。

## ii. 結果

### 〔1時間ごとの授業者の反省〕

#### 1 時間目

→助動詞や助詞は周りの生徒と確認をする時間もとったが、共有をしてもあまり理解していない生徒が見受けられた。

→概要説明では、口頭だけでなく視覚的な助け(動画や写真)も、より理解するためには必要だと思った。

#### 2 時間目

→自分のエピソードに繋げやすいものや、友人が選択するものに人気集中した結果、選択されなかった歌もあった。

→生徒たちの思考をメインにしたい場合、メモ用プリントは、品詞分解を書いておいたり修辞法を絞ったりするなど助けのポイントを工夫しておくべきだった。(加筆修正するパターンのプリントの作成など)

#### 3 時間目

→机間指導の中での生徒との会話をもっと全体に共有すべきだった。

→実際に生徒たちが動く鑑賞の方法をとったことで、生徒たちも飽きずに楽しんでいる様子が見られた。想定していたよりスムーズに移動が進んだため、残り時間によっては代表の作品は二枚より多くても良かった。

授業後には、アンケートを行った。以下は項目の内容とその集計結果や回答例である。

#### ①和歌を通じて、古典世界の人々と気持ちや景色、見ている物など自分と通じるなどと思った点を教えてください。

- ・昔の人も私たちと同じ感情を持っていたんだなと思った。
- ・恋の和歌が多くて、いつの時代も恋についての悩みは似ているし、同じ気持ちだったんだと思った。また、日常をロマンチックに表現して、気づかなかったけど、共感できる内容が多かった。

- ・今の私たちの何かあったら SNS で呟くように昔の人も何か出来事があったら和歌を歌うんだと感じて通じた気がした。
- ・今と同じで小さな悩み事などは多いなと思った。

#### ②【今回の授業を受ける前】の印象として、和歌や古典そのものに対する印象を、5段階で評価してください。

わからない。どちらともいえない。	7
自分から遠い存在	23
自分から近い存在	1
自分から少し遠い存在	31
自分から少し近い存在	10
未回答	8
<b>総計</b>	<b>80</b>

図 12：実践後のアンケート②の回答結果

#### ③【今回の授業を受けた後】の印象として、和歌や古典そのものに対する印象を、5段階で評価してください。

わからない。どちらともいえない。	10
自分から遠い存在	3
自分から近い存在	4
自分から少し遠い存在	8
自分から少し近い存在	47
未回答	8
<b>総計</b>	<b>80</b>

図 13：実践後のアンケート③の回答結果

④授業の活動の中で特に難しいと感じたことを教えてください。

- ・今の言葉と形が一緒でも意味が違うものがあり難しかった。
- ・比喩表現が多いから、一個先回りして考えないと本当の意

味がわからないので、そこが難しかったです。ですが、本当の意味を理解できた時はとても嬉しいし、共感できました！

- ・昔の人の感性と自分の感性は違うというところ
- ・和歌の内容を自分の体験と重ねるのが難しかった。
- ・助動詞の活用や係助詞、古典の日本語訳が難しかったです。

アンケートには、単元前と後の古典への印象の変化として、程度に差はあるものの肯定的な回答が増えていた。

### iii. 考察

今回行った授業では、詩歌の言葉通りではなく、どういった観点なのかについての理解を深めた上で、当時と現代つまりは自分との繋がりを感じて欲しいという意図があった。実際に生徒たちは、自分と同じ心情を感じていることがアンケート①の回答例に書かれている。自身の体験や五感に重ねて活動を行っており、アプローチの一つとしては良かったと考える。しかし、和歌の内容を理解した上で自身の体験に重ねるといことが難しいと考えた生徒も中にはいた。それは、感情を反映させてほしいと言ったものの、切なさや嬉しさなどやや抽象的に考えてしまっていたからだと推察する。加えて、文字数を制限したが一言くらいで終わっている生徒もいたため、Twitter をモチーフにした効果を高めるためには、表現を絞ったり、種類の異なるツイートをいくつか例に挙げたりする必要があった。また、アンケート②の回答では、助詞や助動詞などの基本的な知識への苦手意識が多く書かれていた。やはり覚えなくてはいけない意識がある学習に負担を感じている。反省にもあるように、生徒たちの学習レベルに応じてヒントの出し方を変えたプリントを作るべきだった。今回の授業を通して、生徒たちは新たな友達の長所や教材の見方などの発見をすることも多く、生徒たちのお互いの作品や会話を拾いつつ、繋ぎ合わせてフィードバックをすることが大切だと強く感じた。

### 3. 全体的な考察

実地研究ⅠとⅡを通して異なる校種で学び、中学生と高校生の古典への認識の違いを感じた。中学生は無知なものであるが故の嫌悪感だったが、高校生は単語や文法などの学習事項により、嫌だと思える生徒が多く存在した。古典を読み味わおうとするとき、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能は必要不可欠となる。しかしながらその指導を重視し、生徒が古典自体を拒否するようになってしまふのはあまりに勿体無い。先人のものの見方や考え方に触れつつ、それを広げたり深めたりする授業の実践など、段階を踏みながら古典に対する興味・関心を広げていくことを授業者として意識していきたい。そこから古典に関連する本を読んだり、資料を調べたりして、古典を知ることや考えることの楽しさをより一層自ら求めていくことができる。その繰り返しは古典への親しみを深め、知識を獲得し、生活の質を豊かにすることができる。つまり、古典の授業の時間で、意欲や関心を得ることは、生涯にわたって学習することへ繋がる。これは中

学生でも高校生でも言えることだが、なるべく意欲的に古典に対する意識を持つには、「やらされている」と感じさせないことが必要だ。特に、高校生は受験などの意識もあることで、より古典に対し「やらなくてははいけないもの」という義務感が出てきてしまうが、生徒が意欲的に古典に取り組むためには、義務感ではなく、昔と今は繋がっているという意識が肝要である。そのためにも活動設定を工夫することは効果的である。今回は先人たちの感情に触れる機会として授業を行ったものの、他にも言葉そのものや習慣などを通して古典を身近に感じることができる。学習状況に応じて、生徒たちが身近なことや興味があることを取り入れることと同時に、助詞や助動詞などの基本的な知識への苦手意識を払拭していくことが学習意欲の獲得のための課題である。

### 4. 今後の見通し

授業を行った生徒たちには、今回は、先人と自分との時代を超えた共通点についてのアプローチで抵抗感を減らすことを考えていた。しかし、調べていく中で自分との相違点も何人かメモ用プリントに残していた。異なる点を含めて面白いと感じられるような方法も考えていきたい。また、課題とした、古典を学ぶ上で切り離すことが出来ない基礎知識の習得に関しても、活動を通して少しでも生徒が感じている負担や義務感を減らす手立てを更に模索していきたいと思う。

#### 【参考文献】

1. 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説国語編』2019.3
2. 文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編』2018.3
3. 国立教育政策研究所「高等学校教育課程実施状況調査 生徒質問紙調査(国語総合)」  
[https://www.nier.go.jp/kaihatu/shido\\_h27/h27/01h27seito\\_kokugoSougou.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatu/shido_h27/h27/01h27seito_kokugoSougou.pdf) (2023.1.10)
4. 浜岡 恵子, 山元 隆春「古典を主体的に読むための指導法の研究Ⅳ:「推論する」活動を取り入れた漢文指導の実践」『広島大学付属東雲中学校紀要 46巻』2015.3 広島大学大学院教育学研究科 pp19-26
5. 岩手県立総合教育センター「人物の心情を理解することで、歌物語の世界観に迫る～物語『伊勢物語』『芥川』の登場人物(男)の視点から物語を書くことを通して～」『令和元年度版 資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む授業づくりガイドブック 中学校・高等学校国語科編』2019.12 www1.iwate-ed.jp/tantou/kyouka/seika/kenkyu\_seika/h29/h29\_01\_2\_2koku.go.pdf (2023.1.10) pp63-68
6. 吉田茂樹「アクティブ・ラーニングを効果的に機能させる学習過程の探究-古典指導における表現と評価とをつなぐ試み-」『語文と教育33巻』2019.9 鳴門教育大学国語教育学会 pp44-54
7. 『新編言語文化』東京書籍株式会社 2021.3 p176